稲の道・歌の道

雲南に歌垣のルーツをもとめて――

鈴木英夫

稲の道・歌の道

雲南に歌垣のルーツをもとめて——

鈴木英夫

本阿弥書店

著者略歴
鈴木英夫（すずき・ひでお）
明治45年神奈川県生れ。歌人。千葉医大卒。
北原白秋に師事、作歌を始める。戦後、「コスモス」創刊に参加。現在同誌同人。歌集に『おりえんたりか』（昭30）『えとるりあ』（昭43）『忍冬文』（昭53）、他に『趙君瑛の日記』（昭38）『北原白秋の思想』（昭62）等がある。

稲の道・歌の道 ——雲南に歌垣のルーツをもとめて——
1988年6月15日　初版
定価2200円
著　者　鈴木英夫
発行者　本阿弥秀雄
発行所　有限会社本阿弥書店
東京都千代田区神田小川町3—14　第一万水ビル　〒101
電話　03（294）7068（代）　振替東京0・164430

熊谷印刷 ©Hideo Suzuki　1988
ISBN4-89373-006-1 C0095 ¥2200E

稲の道・歌の道＊目次

はじめに　9
序章　歌垣は文化の礎　15
Ⅰ
今、なぜ歌垣か　17
日本の歌垣　19
Ⅱ
稲の道・歌の道　25
照葉樹林帯の人々　28
第一章　少数民族への旅　33
Ⅰ
雲南の少数民族　35
西双版納へ　38
ハプニングが見せてくれた光景　40

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雲南民族学院　43
II
景洪の町にて　48
タイ族農家の夕ごはん　52
第二章　日本と雲南の民俗生活　55
I
農耕儀礼と年中行事　57
祭りと生活環境　61
II
雲南の祭り　63
祭りといけにえ　68
祭りとうたげ　71
椎葉村の場合　72
歌と踊り　75

第三章　雲南の歌垣　79
Ⅰ
歌垣の実際　81
民衆の即興詩　86
抒情詩の萌芽　90
Ⅱ
賛哈（ザンハ）の出現　94
詩の民族　98
Ⅲ
歌垣と稲作農耕　102
他民族との比較　104
第四章　詩の発生　109
Ⅰ
詩の起源――折口説をめぐって　111

詩の原形質　115

Ⅱ

歌謡と抒情詩——土橋説をめぐって　120
「物語起源説」への疑問　123
歌謡は混沌から生れた　126
芸能の交差点　129

第五章　生活と歌　133

Ⅰ

歌垣はなぜ滅びたか　135
大和政権と歌垣　138

Ⅱ

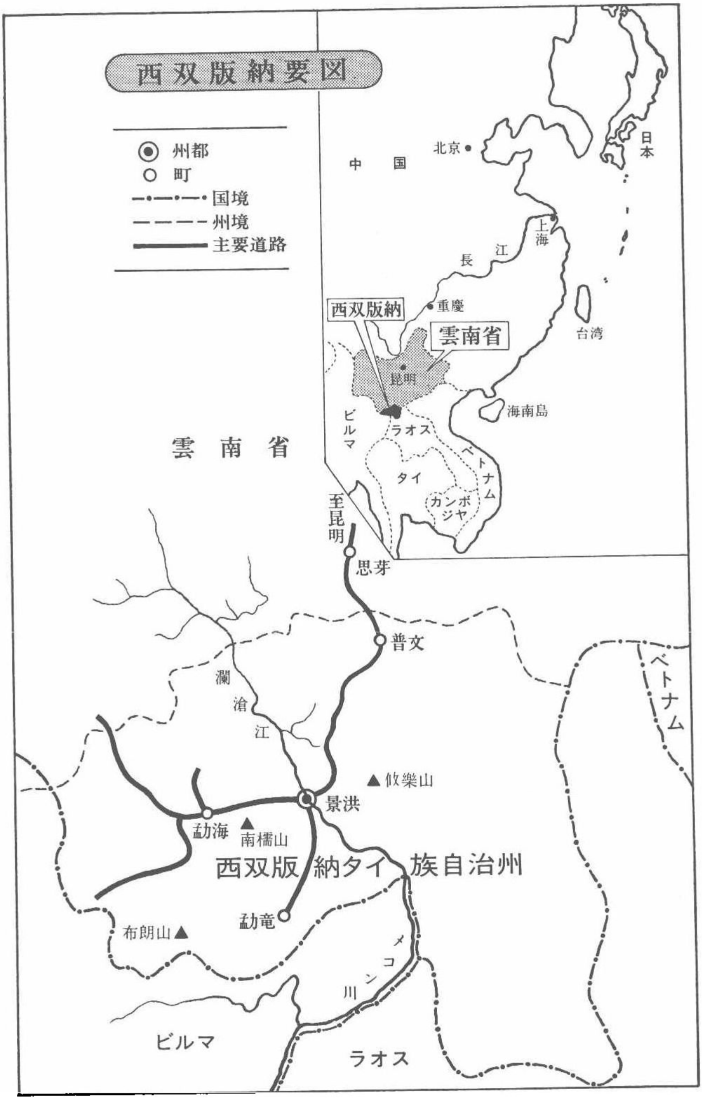
歌垣のその後と神楽歌　142
神楽歌の庶民性　145
民衆の歌ごえ　150

〈附〉水族情歌選―訳― 155
前言
訳詩
附記
あとがき 182

装幀　麻里光一
表紙カバー絵『水族情歌選』（貴州人民出版社）

稲の道・歌の道

――雲南に歌垣のルーツを求めて――



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

　ＮＨＫのテレビ放映にはじまって、一時日本中がシルクロード・ブームに湧き立ったことがあります。
　私がシルクロードに興味を持ったのは、少年時代からのことで、実際に彼の地を旅行したのはＮＨＫよりも五、六年早く、そのころは中国との国交が回復していなかったので、逆の方向から、ギリシャ、トルコ、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インドと廻り、ついでエジプトやシリア、メソポタミアと、五回にわたって歩いてみました。そのころは特別な人をのぞいては、一般の関心はきわめて薄かったと思います。
　そのうちに例のブームがはじまり、猫も杓子も(失礼!)敦煌へ、ゴビ砂漠へと夢とロマンを拡げていった。そのことはたいへん結構なのですが、私はすこしつむじまがりですから、「何か一つ忘れていることがありはしませんか?」と言いたくなりました。
　シルクロードを通じてはるか西方の文化がわが国へ伝わり、日本の文化の大きなやしないとなったとしても、そうした文化を受け入れ、噛みくだき、自らの血肉と化すためには、こちらでもそれを受け入れるだけの基盤が無ければ不可能でしょう。言うまでもなく、日本のそれは

稲作を中心とした農耕文化であって、狩猟採集や牧畜民の文化、あるいはおなじ農耕でも麦作の文化とはちがっていたはずです。しかしこのことが注目されはじめたのは、比較的最近のことに属します。

＊

若いころの私は、軍医として中国の戦場へ連れていかれました。上海附近でのすさまじい陣地戦から、長江（揚子江）をさかのぼってはるか奥地までの苦しい戦闘でしたが、その間に痛感したのは、私たちが戦う相手の中国に対して、いかに無知だったかと言うことでした。眠れる獅子。十八世紀以来、ヨーロッパの植民地政策によってずたずたに切り裂かれ、喰い荒された瀕死の老大国。私たちが教えられていた常識はみごとに裏切られて、ものすごい彼の国の人々の抵抗に出会ったわけです。

私たちが、それまで教えられていた世界史とは、どうも少しちがうのではないか。それならば現に今自分たちの戦っている相手の中国とは何なのか、そして日本とどうかかわりがあるのか。

戦争と言っても、一年中弾丸を打ち合っているわけではありませんから、どうかして暇があると、行く先々の民家の中から、彼らの読んでいた書物や雑誌、教科書、時には遺された手紙や日記の類まで引っぱり出して、手当り次第読んでみる、ということを、私はずっとやってお

りました。

どうも私の世界史の知識というのは、ヨーロッパ人が書いた、ヨーロッパ中心の歴史、あるいはその受け売りの日本人の書いたものばかりではないか、と反省しました。

どうしても一度この目で見、この耳でたしかめて、ヨーロッパ人の目ではなしに、自分なりの歴史観をたしかめてみたい、というのが、その後、私が古代オリエント世界やシルクロードを何度も旅することになった動機です。日本文化の源流をたずねるという、今度の中国奥地への旅も、その延長線上にあると言えます。

＊

雲南と言えば、つい最近まで、一般の日本人にはなじみのうすい土地でした。早い話が正確にその地の地図を頭に思い描ける日本人は少なかったのではないか。しかし私には、若いころから忘れられない一つの思い出がありました。

昭和十四年の春から夏にかけて、(半世記も前の話です) 私は中国江西省の首都、南昌という街に駐屯していました。隣家は古びてはいるが大きな邸で、この家の子弟のほとんどは日本へ留学しており、留学先の日本から、あるいは国内の各地からやりとりした、たくさんの手紙類が、天井裏の物置きに残されていました。

そのうちの一人、張佩芬さんは、昭和六年ころ日本の奈良女高師に留学していましたが、彼

女の残した手紙類の中には、同じ留学仲間の一人から寄せられた数十通が一束になっていました。そしてこの友人というのが雲南省昆明出身の、雷蓮さんというお嬢さんです。

蓮さんははじめ奈良女高師へ入ったのですが、のちに医者になろうと志望を変え、東京へ出て女子医専を受験しようとして、途中病気となり、入院してしまいます。手紙はこの間に書かれたものですが、そのうちの数通は、私がのちに書いた戦争のドキュメンタリー『趙君瑛の日記』の中に（名前を変えて）おさめられています。ここにその一節を記して見ましょう。

＊

「（入院中の）この幾日か、退屈で困る時に暇を消すただ一つの方法は、低声で唱歌を歌い、そっと簫を吹いて見ることとです。よろこびの時は高歌し、悲哀失意の時は悲吟する。それによってどれほど心が慰められるか分りません。私は、肚の中にある歌を、片はしから全部歌い、脳裡にある曲を、全部吹いて見るのです。ただし有気にして無声で。（中略）（同室の）女の子から、うまいことを習いました。彼女は小さな手鏡を二つ使って、頭のうしろでも、窓の外でも、どこでも眼の前へ写し出してしまうのです。私も早速やって見ました。戸外はもうすっかりよい気候になって、人々は楽しそうに歩いています。空の涯には白い雲が流れ、一群の小鳥が飛び去ってゆきます。こんな時、鏡の中の風景は、現実よりも強く、私に故郷の春を思い出させます。雲南！はるかな故園！」

「(故郷の親友の死の知らせを受け、生前の手紙を取り出して)どの手紙も、まるで一篇の詩を読むような、心を打つものばかりです。読みながら、故郷のこと、幼い日のことを、まざまざと思い浮かべ、心は異様にふるえて、眠ることも出来ませんでした。ああ雲南。はるかな故園。何時の日か私は再びあの五華山の頂きに立って、懐しい故里の街を眺めることがあるでしょう。」

この年の九月、例の(旧)満州事変が起ると手紙の調子はにわかに激越となり、留まって勉強を続けるべきか、帰国して抗日運動の先頭に立つべきかをめぐる、留日中国学生団のあわただしい動きや、事変に対する国際聯盟理事会の動きを批難する、女性とは思われないはげしい文章が出てまいりますが、手紙は九月二十六日(昭和六年)付を最後にぱったりと絶えて、その後の彼女の運命を知ることは出来ません。

同じ中国でも、雲南は僻遠の地にあり第一次民国革命後も半独立国のような地位を保っていました。省主席唐継堯は日本の陸軍士官学校出身で、部下も日本留学生出身者が軍、政各方面の実力を握っていて、昆明は非常に親日的な街だったということです。主席の唐は、邸内に日本風の家を作り、わざわざ日本から取り寄せた桜の木を植えていたと言います。

蓮さんの手紙には昆明の地名は出て来ませんが、五華山の名はかつて昆明にあったので、この街の出身者であることはたしかでしょう。

今度の旅で雷蓮さんに巡り合うなどということは思ってもみませんでしたが、私の心の何所かには、あの半世紀前の一少女の、望郷の思いに重なるようにして、まだ見ぬ街昆明、はるかなる雲南への、一種のあこがれがあったことはたしかです。

*

しかし実際にその地を踏むまで、現地で何を見ることになるのか、はっきりしたイメージを思い浮かべるよすがはなかったという方が本当でしょう。

行って見て分かったことは、そこにはまぎれもなく日本の基層文化ときわめて親しい、農耕民の生活が今も生きつづけているということでした。

私は若いころから北原白秋について短歌を学び、今も作りつづけている者ですから、日本の詩歌の起源に深い関心を持つわけですが、詩歌もまた民族文化の一面を担うものであってみれば、その根源をきわめるためには文化の基層にまで探針（ゾンデ）を入れてみなければなりません。そのゾンデがどこまで深く詩歌の深層に及び得たか、大方の皆様の御批判を得たいと思います。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com